唐代における箏の演奏実態と奏法の研究
——唐詩ならびに古楽譜を手がかりに——

李嬌寒（国立音楽大学大学院）

本論文は、唐詩における音楽的場面の検証および日本に現存する古楽譜の解読を通じて、伝承が失われた唐代の箏の演奏実態を跡づけることを目的とする。これまで箏の形態や奏法の整理、奏法用語の共通性、古楽譜の楽理分析が行われてきたが、演奏場面や奏者の身分との関連、奏法の具体的解明には課題が残されていた。本研究ではこの課題に取り組むために、唐詩や古楽譜を資料とした。

論文は序章と第１章から第４章、終章で構成される。第１章では『旧唐書』、『新唐書』を基に、中国における箏の発展、唐代の音楽機関と宮廷音楽、日本における箏の受容と展開を整理した。第２章では唐詩に現れる箏の記述を分析し、箏の演奏場面が宮廷内外の宴会や楼、夜など多様であることを明らかにした。詩に登場する演奏者の多くは女性であり、高貴な身分の女性も箏を演奏していたことが示された。さらに、「掩抑」「調」「弄」などの奏法用語を抽出し、唐代箏の演奏には高度な技術と多様な奏法が使用されていたことを確認した。

第３章では古楽譜『仁智要録』に基づき、右手と左手を併用した複合的奏法と音高変化を重視した技法を示した。右手では「食指」「中指」「大指」を使った弾き方があり、左手では音色や和音効果を調整する技法が確認された。第４章では『類箏治要』と『箏譜断簡』を分析し、特に左手奏法の多様性に注目した。『箏譜断簡』における右手と左手の技法は唐代音楽理論に基づき、また独奏曲が多く収録されていることから、唐代箏は独奏楽器としても機能していたことが示された。

終章では、唐代箏が宮廷内外で広く用いられ、演奏場面や身分に応じて多様な奏法が選択されていたことを総括した。唐代箏は、右手・左手の多様な技法により音高の変化を生み、宴会音楽から独奏表現まで対応する柔軟な楽器であった。本研究は、唐詩と古楽譜を統合することで、唐代箏の実態解明に新たな視点を提示するものである。